

私達の生活と結びつけて古典と向き合い

生徒達に表現することの素晴らしさを伝える授業の工夫

——私学の農業高校で唯一の国語科教師として私が大切にしてきたこと——

平 岡 敦 子

はじめに

私が、9年間の国語科教師生活において大切にしてきたことは、「文学を学ぶことの楽しさ」「文章を書くことの楽しさ・素晴らしさ」を生徒達に伝えることのできる授業作りである。

特に私の勤める高校では、古典や漢文に興味を抱く生徒はほとんどおらず、古典や漢文を学ぶことの意味がわからないと言う生徒がたぐさんいるのである。こういう意識を持つ生徒達に古典や漢文の魅力・面白さを伝えることを目標に私は、独自の授業スタイルを考へ実践してきた。

私は、現在の高校の古典指導において、助動詞などの細かい文法事項に注意が注がれ、古典を文学として楽しむことが軽視されている傾向を残念に思っていた。私は古典を学ぶ意義を大きく次のように考えている。

1、古典を通じて、当時の人々の考え方や文化、生き方を知ることができる。

2、古典を通じて、現代の私たちの生活、考え方、生き方を見つめ直すことができる。

私は、この2つを古典を学ぶ際の、重要なポイントと考え、昔の人々の生活・考え方と現代の私たちの生活・考え方を照らし合わせ、自分たちの生活や生き方を考え直すことのできる授業作りを心がけてきた。

文学教材を指導する際には、教師が用意した発問に生徒が答える・というだけではなく、生徒がその文章に触れることで何を感じ、何を考えたのか自分自身と向き合い文章にするということを経験を取り入れてきた。

また、本校の生徒達は、「小論文」や「読書感想文」に拒否反応を示す者も多い。小学校、中学校時代から上手な文章・作文を書くことを求められ続け、自分の感じたことを素直に書いても評価されずに来た生徒が多いのだ。

正確な漢字や言葉を使い文章を書くこと、また、論旨の通った上手な文章を書く能力をつけることは大切である。しかし、私は、表

現指導において大切なのは文章を書く能力を高め、また上手な文章を書くことを生徒に求めることだけではないと考えている。人間が、考えたことを文章に表し、第三者に伝えることができる素晴らしさ、人と人とが文章や言葉を使って思いを交流できることの素晴らしさを伝えることも大切なことだと思うのだ。

そのため、私は、生徒が楽しくなるような、表現したくうずうずしてしまうような表現教材の開発をめざして工夫を重ねてきた。

また表現指導の際、生徒達には「上手い文章を書くことと自信の無い生徒が多いのだ。私は、そういう生徒達に対して、「みんなが人に自分の思いを伝えようとして一生懸命に書いた作文には悪文はない。」ということを語り続けてきた。実際、私はそう思っている。

そして、生徒達を書いた文章は生徒達の知的共有財産として必ず全員のものを印刷し配布してきた。それは、国語とは、数多くの仲間の表現した文章や作品、考え方に触れることで、自分と他者との考え方の違いに気づき、自分自身を見つめ直すことのできる科目だと考えているからである。その後、仲間の文章の良い点を必ず挙げ、交流するという授業スタイルを続けてきた。文章を上手に書くことだけにねらいを定めるのではなく、書くことの楽しさ・素晴らしさを実感できるような表現教材の開発に工夫をこらしてきた結果、私の提示した表現教材に対して毎年、八割〜九割の生徒が「表現することが楽しかった」と回答してくれている。

私は、このように独自に生み出してきた自分の授業方法を一年ごとに振り返り、その実践をレポートにまとめ2004年から教育雑誌などに発表してきた。

ここでは、私が工夫してきた9年間の古典・表現指導の実践を報告したい。

1 高校一年生指導の工夫

(1) 百人一首から恋の物語を創作してみよう

単元「万葉集」「古今和歌集」

「万葉集」「古今和歌集」を学んだ際、教科書で取り上げられている和歌は、百人一首に収録されている和歌を多数含んでいた。そのため、百人一首から恋の歌34首とその現代語訳を印刷し配った。本校は、全寮制のため校則で男女交際が禁止されている。しかし、生徒達は恋の歌や恋愛小説が大好きなのだ。そのため、生徒達の興味・関心の集まりやすい恋の歌だけを選別し紹介したのである。その後、プリントした和歌の中から、自分の好きな和歌を選び、舞台を現代にアレンジし現代に生きる自分達の思いや考え方を反映させた「現代版 百人一首恋愛小説」を書くことを提案した。なるべくその和歌の内容に合うようなストーリーを創作するよう指示。

生徒達が創作した恋愛小説は全てを印刷し、配布。プリントした全作品の中から、できるだけ多くの作品を選び、その作品に対する感想や講評を書くよう指示。書いた感想、講評は授業で発表しあい、後日、本人にも渡した。

《生徒作品》

君がためおしからざりし命さえ長くもがなと思ひけるかな

●時は、昭和20年春のこと。太平洋戦争の真つ只中、東京や大阪が空爆を受け、日本の敗戦が濃厚だった時代、日本軍は捨て身の攻撃を加えていた。戦艦大和そして特攻隊など次々に出撃していた。日本の若者が「国のため、天皇陛下のため」と次々に叫びながらも心の中で何かそんなものではなく、大切な家族を守るために嫌でも命を投げ出し戦っていた。みなさんは神風特攻隊を知っているだろうか。簡単に言えば、飛行機に爆弾を身につけ機体ごと体当たりし敵の空母や戦艦を沈めるというものだ。燃料は片道分しか入らない。もどる必要はないということである。鹿児島県にそんな神風特攻隊の出撃前に駐留する基地がある。そこで起きた物語である。主人公は照子という女性である。彼女は特攻隊の基地の中にある炊事場で働いていた。日々、朝早くに起きて、ご飯を作り、訓練を終えた兵士にご飯を出すのである。泊り込みで働いていた彼女はあることに気付いた。それは、不定期に人が減っていくのだ。最初の内は、作る量が減ったと少し楽になった気分であったが、ここが特攻隊の基地であることを忘れてはいけない。人が減っていく敵襲があり出撃していったということである。特攻隊は絶対、生きて帰らないというのが掟だったため、昨日見た人が朝食を取りに来ない時は、その人はもうこの世の人ではないのだと自然と彼女も察していた。そう思うと複雑な気持ちになる。実はこの時、兵士の中に気になる人がいたのだ。この日もそんな思いをしながら炊事場に入った。そしていつものようにご飯を出すと、「いつもご飯ありがとう。今夜、少し会えないかな」といきなり言われる。あの人だとつさに顔を赤くして、「あなたの名前は」と聞くと名は小野寺徳幸と言う人だった。

夜の炊事場が終わり、彼の待つ場所へ行った。彼は飛行機の前にいた。彼女自身、前から少し気になっていた人だったので緊張していた。好きと言ってももうすぐ死んでしまう兵隊さんを好きになり、付き合ってはこの世に未練が残る、死ぬに死ねない。そう思い好きという思いを行動に出すことは少なかった。しいていえば、ご飯の下に小さな卵焼きを入れてあげただけだった。(卵は当時、貴重品であった)彼は言った。「いつも小さな卵焼きを入れてくれてありがとう」

照子は「いえ」と少し照れて言った。続けて彼は言った。「私は、明日の朝食は食べても、明後日の朝食はもういらぬ。いきなり出撃命令が下り、沖繩に飛ぶことになったのだ」いきなり言われた照子はどうしていいかわからなかった。彼は、また悲しげにこう言った。「いつもあなたの笑顔を見ていられて幸せでした。もし、この時代に生まれていなければ私はあなたに好きだと言ったでしょう」照子もすかさず言った。「私も平和な時代に生まれていれば、同じことを」涙で声がつまっていた。出会って二ヶ月話したのはこの日だけの二人であったが、それでも二人は幸せであった。そつと彼は、照子を抱いてこう言った。「私はあなたを守るために出撃します」その言葉に対し、照子は「あなたのことをずっと愛し続けていますか」と言つて先のない未来を夢見ていた二人であった。二人は別れ際に「また明日」と言った。次の日の朝、彼はいつものように朝食をとった。今日はいつもより多く食べていた。この日、照子は卵焼きをご飯の下に入れなかった。食堂から彼が出る時、もう会えないのね、と心に刻み後ろ姿を目に焼き付けた。周りに上官がいなければ「さようなら」の一言だけでも言いたかった。もう会えない

い：そう思っていた。

だが夜、また飛行機の前に行けばいいかもしれないと思い、行ってみた。そしたら、なんと飛行機にエンジンがかかっていた。彼の飛行機にエンジンが入っていたのだ。彼は、飛行機の中から顔を出して「乗れよ」と言った。小さい飛行機に二人で乗り、ついに空を飛んだ。基地が小さく見える。彼は突然、「朝、顔を見てもう一度会いたくなつたんだ。空の上なら何を話してもばれないでしょ」照子はずなずく。二人はしばらく空の上で話した。そして、朝取つておいた卵焼きを彼の口に入れて「最後の卵焼きだよ」と言った。そのとたん、彼が飛行機を宙返りさせた。ちょうど逆さになった時、小さく彼は照子にキスをした。

そして、二人を乗せた飛行機は星空の下をしばらく飛び、最初で最後のフライトデートを楽しんだ。彼は泣いていた。そして、照子も泣いた。二人を乗せた飛行機の燃料はもう少なく、燃え尽きようとしていた。だが、二人の恋は燃え尽きることはなかった。飛行機がおりかかる。その時、彼がこう言った。「明日の今頃は、この飛行機とともにもう消え去ってしまう。この体もなくなる・怖い・」その後、彼は何も言わなかった。デートも終わりゆつくり地面に降りる。優しく手を伸べて飛行機を降した。二人は別れ際にこう言った。「またいつか」・もういつかは無い。でもそう信じてとっさに言った。二人は別れた。彼は夜、手紙を書いていった。出撃の朝、朝食を取りに来る彼の姿はない。基地は騒がしかった。彼を含め12人がその日に出撃であった。出撃に先立ち式典が行われていた。ついに飛行機に彼が乗った。「バンザーイバンザーイバンザーイ」と声が聞こえた。彼女は炊事場を飛び出し、彼の元に走った。「間に合っ

て」そう思った。何度も敵の弾が飛んでくる。でも滑走路にいくために必死だった。しかし、ついた頃にはもう空に飛んでいた。最後に会うことはなかった。あきらめて帰ろうとした時、一機の飛行機が照子の上でヨタヨタ回っている。不思議に思った。しばらくして、その飛行機は沖繩のある方向へと飛んでいった。悲しかった。彼は、今頃空の上、もう会えない人になつてしまった。「いやー」涙もかされるほど苦しく泣いた。一週間後、今日の炊事場に彼は来ない。これからもずつと。でも彼は照子に手紙を残して行った。「君がためおしからざりし命さえ長くもがなと思ひけるかな」彼は今日も沖繩の海に眠っている。

2 高校二年生古典指導上の工夫

(1) 「現代版 徒然草」を書いてみよう

古典を通して現代の私たちの考え方を見つめ直す

単元 『徒然草』「序段」「手のわるき人の」(第35段)

「仁和寺の法師」(第53段)「相模守時頼の母は」(第184段)

授業で『徒然草』を学んだ後、この古典から学んだことを生かし、自分自身の生き方、感じ方と向き合あせるため次の課題を生徒達に提示した。

みんなも兼好法師になった気分です『現代版 徒然草』を書いてみよう！

① あなたも、つれづれなるままに・・心に浮かんだとりとめもないことをエッセイ風に書いてみよう。

② 「手のわるき人の」のように、あなたも、こうすべきだと思う、と信念を持っていることはありませんか？

③ 「仁和寺の法師」のように、あなたもハメを外して失敗したり、しられたりしたことはありませんか？そして、こんな風に何とか命が助かり感謝したこと、自分の行動を反省したことはありませんか？

④ 「相模守時頼の母は」のように、あなたも人に言われた言葉で印象に残ったもの、考えさせられた一言はありませんか？人の行動に感心したことはありませんか？

《生徒作品》

● 「ああムカツク、イライラする」と私は、怒りながら友達に愚痴をこぼしました。すると、友達が「ムカツク」って言ったら自分にむかつてくるよ、と答えました。その時の私は、怒りで心が落ちていいていなかったたので、聞き流していましたが、よくよく考えてみました。すると、やっぱりそうだなあと感じました。

悪い言葉を言えば言うほどどんどん自分に腹が立ってきて、とても嫌な気分になりました。逆に、うれしい事があった時に喜びを言葉にして出して言う時の方が怒りを言葉にして言う時より大変でした。

そのことに気付いた時から私は、怒りがつい言葉に出てしまいそうになったら、我慢するように心がけています。ぐっとこらえて怒りを静めています。たまに言ってしまうようになりますが、以前よりは怒りを言葉に出す回数が減ったように感じています。これか

らは、うれしき、喜びを言葉に出していき、周囲の人も笑顔になる言葉を出していこうと考え直しました。

友達の「ムカツクって言ったら自分にむかつてくるよ」という一言が今も、印象強く残っています。考え直すきっかけとなって良かったです。その友達に感謝感激です。

(2) 徒然草「仁和寺の法師」(第53段)の続きを創作してみよう

徒然草「仁和寺の法師」(第53段)の特徴は、内容が耳と鼻の取れた仁和寺の法師が寝込んでしまう所で終了してしまっている所である。その後、この法師がどのような人生を歩んで行つたのかについては全く触れていない。私は、この点に注目し授業後、「この随筆の続きのストーリーを400字以上800字以内で書いてみよう」という課題を提示した。この章段は、教訓的な要素を含む章段である。この章段を学び生徒たちは兼好の私たち読者に対するどのようなメッセージを感じ取り、そこから何を考えたのか……。それが、その後の法師の人生・将来を書くことで現れてくると考えたからである。続きのストーリーには必ず読者に伝えたいメッセージを盛り込むよう指示した。

《生徒作品》

● 耳と鼻がとれてしまつて、初めのうちはショックが大きく外にも出られないほどだったが、ある人との出会いがそれを変えた。これは、そんなお話。彼との出会いは病院だった。彼と呼ぶには小さい

男の子。7歳ぐらいだろうか。男の子はじつと僕の顔を見ている。きつと、子ども独特の好奇心であろう。だが、僕は不思議と嫌ではなかった。男の子は一人で来ていた。(なぜ、一人でここにいるんだ?) と思っているうちに男の子はこっちにとことこ歩いてきて、手に持っている紙を見せてきた。「おじさんはどうして、耳と鼻がないの?」紙にはそう書いてあった。僕は、自分がしたことをおまかに話した。男の子はふんという顔をした後、何か考えていた。僕は、自分が思っている疑問を男の子に聞いてみた。

「何で君は、一人でここにいるんだい? ママかパパは?」僕は聞いてから後悔した。男の子がとてもさびしそうに笑うから。だが男の子は話し出した。「パパはいないよ。ママは家で待っている。僕はシンゾーって所が悪いんだって。初めは5歳になれないだろうって言われたの。で、次は7歳になれないだろうって言われて、今は次に発作が出たら最後なんだって。ママは泣きつかれて最近話してないんだ」

「でも、僕はそれでもいい。たとえ死んだとしても、僕の存在が消える訳じゃないと思うから。一生懸命生きれたらそれでいい。」僕は男の子のことをすごい立派だと思った。自分はいつまでもよくよしていたのに。男の子はまだ小さいのに自分のことをしつかり受け止めている。まだ自分が死ぬ訳ではない。だったら、自分なりにがんばって前向きに生きていこう、そう思ったのだった。

●もう疲れ果てて、起きる気力もわずかに日々は過ぎていきました。見舞いの客もいつしか少なくなり側にいるのは年とった母一人になりました。外の季節は秋を向かえ、木々が黄や紅に染まってくくの

をただばんやりと見るともなく見ていた時、縁側にほど近い柿の木の上に一人の童がよく熟れた柿の実を片手にこちらを見ているのに気がきました。ああ、またバケモノだの気味が悪いだのと言われると思い、いそいで顔をそむけてそちらの方を見ないでいると、コトリと音がして枕元にその童が座っていました。家に帰りなさいと言おうと思ったが、一体、最後はいつ人と言葉を交わしたのだろうか、かすれた音しか出ませんでした。

童は、一言も口を聞かずにただ柿の実を置くとそつと帰ってしまいました。なんときれいな色だろう。夕方の日のようだと思つて柿の実を見つめて思いました。つい先ほどまでただばんやりと空を見ていた悲しいままでカラッポの心にそのあたたかい色が染み渡りました。いづりでしょう。縁側の外へ立ったのは。足の下では大地が笑っていました。

頭の上では、風が恵みと時と歌い、木々はざわめきながら誇らしげにその実をかざしていました。その日からみるみるうちに元氣になり、春がめぐってきた時は、すっかり丈夫になっていました。そして、法師は土を耕そう、大地に根ざそう、そうしながら人々に教えを説く法師になろうと、クワを持って外にでました。とそこにある時の童が笑顔で立っていました。歌うような声で「大地に学びて、人に説くのに顔など気にする所でないだろう?」それだけ言うと、ふわつと春がすみの中へ走っていってしまいました。その後ろ姿に手を合わせながら、小さき事であろうと心にしみれば何よりも大きいのだと思い、そんな教えを人に伝えていきたいと思うのでした。さて、あの童は誰だったのでしょう? 見るに見かねた柿の木の精だったのでしょうか? それとも法師の家の座敷童子だったのでしょ

うか？それはわかりませんが、秋になると縁側に柿の実が毎年、一つづつ置かれているのでした。

●仁和寺に通っている男が法師の家へ見舞いに訪れると耳と鼻のもげた、醜い顔の法師が布団の中で横になっていた。「調子はどうだ？」「まあ、ぼちぼちだな」「寺には来られそうか？」「ああ。そうだな。茶でもいれてくるか」部屋を出た法師は、数分後、茶とようかんを持って帰ってきた。

しかし、目の前に出された茶を男は顔をゆがめて見るだけで口へは運ばなかった。

「どうした？俺の茶が飲めねえってか？」法師の冗談に、男は苦笑いを浮かべ、「すまん」と一言謝った。しかし、男は茶を飲むうとはしなかった。それを見て、法師は豪快に笑ってみせた。

「そうか、そうか。こんな顔が目前にありゃあ、茶もまずくならあな」男はゆつたりと首を振った。「何でだろうな。どんな顔になっても、お前はお前でこの茶だつて旨いはずなのにな。気がついたらお前の顔に目が行って、それを見下す自分がいる。俺は何のために坊さんをやってるんだろうな」

法師は自嘲の笑みを浮かべる男に寄り、優しく語りかけた。「何を言うかと思えば、まったく、このご時世にお前みたいな正直者、そうはおらんぞ」男は曖昧に頷くと既にぬるくなった茶を一口すすった。「いい茶だな」「無理して飲まんでも、良かったのだぞ」「大丈夫だ。ただ・・・気付いたんだ。どんなに顔が醜くても、茶の味も人の心も変らない。だから、俺はもう外見に惑わされない。俺は、お前の優しい心が好きなんだ」男は、法師の体を強く抱き寄せた。

法師は、不器用な抱擁を優しく受け入れた。「この温もりを俺は二度と手放さない。それだけで、俺は充分なんだ。

(3) 『論語』に親しみ、自分自身と向き合おう！

単元『論語』孔子

愛農学園は、キリスト教主義の学校なので、聖書の授業があり、生徒達は三年間聖書を学ぶ。また月々土曜日まで毎日礼拝があり、聖書を拝読する。そのため生徒達は聖書になじみ、親しんでいる。『論語』と『聖書』は面白いことに、孔子とイエスが表現は違うが似た意味の発言をしていることが多い。生徒達に『論語』に親しませるため、『論語』は中国の『聖書』とも言えることを話し、また『聖書』と内容が似ている部分を紹介した。

授業で『論語』を学んだ後、生徒達に数千年前の中国の文章を読んでどう考えたのか、自分自身に向き合って欲しいと思い、次の課題を提示した。

次の二つの課題のうち、一つを選び、自分の意見を述べなさい。

I 『論語』の自分の気に入った言葉、『聖書』の自分の気に入った言葉を書き出し、なぜ気に入ったのか自分の思いをまとめなさい。そして、それぞれの書物の内容について比較し、相違点をまとめなさい。

II 『論語』あるいは『聖書』の中で心に残った言葉を指摘し、その理由をまとめなさい。そして、自分が人に言われた言葉や耳にした言葉で印象に残った言葉を紹介し、その言葉を選んだ理由を

まとめなさい。

Iの課題は、普段生徒達が慣れ親しんでいる『聖書』と今回学んだ『論語』を比較させ、お互いに似た要素を多く持つ二つの書物を客観的に分析し、自分の意見をまとめてもらうのがねらいだったが、実際に授業で学んだ『聖書』の箇所だけでは『聖書』と比較し論述することが難しかったようだ。

IIの課題は、『論語』の言葉だけでなく、それを受けて自分の今まで生きてきた人生を振り返り、自分の人生において感銘を受けた言葉について深く考え自分の意見をまとめさせるのがねらいである。課題提出後、生徒には自分の書いた文章を全員の前でスピーチし発表してもらった。発表後、何人かの生徒を指名し、仲間の発表についてどう思ったか等、意見を交流し合った。

《生徒作品》

●私が『論語』を勉強して一番印象に残った言葉は「人知らずしていきどおらず、また君子ならずやと」だ。意味は、人が自分の評価を認めてくれないのを不平不満に思わない人は立派な人だという意味だ。

私は、この言葉を聞き『聖書』の「マタイによる福音書」六章一節を思い出した。「見てもらおうとして人の前で善行をしないように注意しなさい」だ。イエスも孔子も同じことを言っているなあと思った。

私はいつも人からの評価を気にしているところがある。寮で同期

や後輩に注意する時も、嫌われるかもしれないと少しためらってしまう。テストの時は、人に誉められたりすることが、自分のパワーとなっているのかもしれない。しかし、こういったことは自分を満足させたいだけで、他人には嫌悪感を抱かせるのだと思う。いわゆる自己中だ。

人に評価されなくてもする善い行いは、本当の思いやりなのではないかと思う。トイレのスリッパをそろえたり、掃除を頑張るということも小さなことではあるが思いやりだと思う。

私はこれから、人の評価は気にせず、小さな思いやりを持った行動を少しずつでも実践していきたい。

3 高校三年生古典・現代文指導上の工夫

(1) 「私の^ををかし^あはれなり」コレクション、「僕と私のコレクション」を書いてみよう

単元『枕草子』

古典で『枕草子』「春はあけぼの」「すさまじきもの」の章段を学んだ際、『枕草子』類聚段から生徒が興味を持ちそうな章段を32段選び、現代語訳をプリントして配布。古典を通して、現代の私たちの環境を見つめ直すために清少納言になったつもりで随筆を書いてみようと提案した。生徒作品は全て印刷し、授業で意見交換した。

《生徒作品》

●春は、授業中寝ている姿、あはれなり。夏は、蚊に襲われている

人、いみじうあはれなり。秋は、窓に当たるトンボ、いとをかし。
冬は、鼻の赤いいとをかし。

●春は、マスク。花粉症の人はこれがないとくしゃみが止まらな
い！ついでにサングラスもあれば完璧。

夏は、帽子。強い日差しから守ってくれる。服に合ったキャップ
を選んでおしゃれ度もアップ！麦わら帽子もをかし。

冬は、ホッカイロ。あたたかいポケットに手をつっこむのは幸せ
次の日になると硬く冷たくなっていてわろし。

●気持ちの良いもの 干したてのフカフカの布団。半日で乾いてし
まい終わった洗濯物。ぞうきんがけまでの床。整頓されている机
の上。全てに斜線が引いてあるやることリスト。うちのウサギの毛
並み。

●ないと寂しいもの いつも聞こえる同室者の後輩のうるさいび
き。

(2) 小説『こころ』を読む 主体的に文学教材と向き合う授業を
めざして

『こころ』を扱うにあたり、授業後生徒達が主体的にこの作品と
向き合う過程を大切にしたいと考え次の課題を提示した。

① あなたの友人は、まだこの『こころ』を読んだことがあります
か。あなたはこの友人にこの小説を紹介することになりました。

この小説の魅力的な点、あるいは魅力的でない点について必ず指
摘し、この作品を紹介する紹介文を400字以内で書きなさい。

② この後、「私（先生）」、「K」、「奥さん」、そして学生である「私」
はどのような人生を歩むことになったのか自由に想像し、『こ
ろ』の続きのストーリーを800字以内で書きなさい。（注…小説に
は、読者に伝えたいメッセージやテーマが内在しています。この
小説を読み、自分は何を考え、そして読者に何を伝えたいのかを
よく考え、結末を作成して下さい。そして、どうしてそのような
結末にしたのか登場人物の性格をよく考え、できれば結末に至る
行動を起こした理由、根拠を明確にして作成して下さい）

①の紹介文からは、生徒達がこの作品をどう捉え、どう評価した
のかが現れる。また、②の続きのストーリーからは生徒達がこの作
品の登場人物の生き方、考え方をどう捉え、自分自身の考え方、生
き方と向き合いながら、この登場人物に今後、どういう生き方を歩
ませたいか自分自身の生き方の理想と照らし合わせたり、登場人物
の性格からどのような生き方を選ぶのか想像する思考力を働かせる
ことのできる問いである。生徒の作品は、ほとんど全てを印刷し配
布。仲間の作品に意見を言い合う意見交換をした。

おもしろかったのは①の問いに対しては、この作品の短所を挙げ
て、人にすすめない本として紹介文を書いて良いと話しておいた
のだが、クラスのはほぼ全員がこの小説を人にすすめた良い本とし
て長所を指摘して紹介文を書いたのである。クラス全員の生徒達が、
この『こころ』を読むべき価値のある本と評価したのである。

②の続きを書くという課題では、多くの生徒達が「先生」が自殺

をやめ、あるいは奇跡的に命を回復し、奥さんと残りの人生を「K」に対する罪を感じながらも、前向きな姿勢で生きていくという結末が多かった。また、「K」は先生のことを許しているという結末が多く、生徒達がこの小説をハッピーエンドにし、明るく前向きに生きていく、そういう作品にしたいという思いが伝わってきた。

この授業終了後、アンケートをしたところ多くの生徒が、この『こころ』の授業に対し、勉強になった、面白かったと回答してくれたのである。国語の苦手な生徒が多い本校において、しかもこのようなレベルの高い文学作品を扱った授業で7割以上の生徒が授業に対して面白いと回答してくれたことは、やはり生徒自らに自分と向き合い、主体的に考えさせる課題を提供したことが大きく影響しているのではないかと考えている。

おわりに

生徒の感想をここで紹介する。

・僕は、平岡先生が授業でみんなの意見をプリントして、いろんな人の考えとかがプリントで見ることができたそれがすごく良かったです。学年が違っていたら考えを知ることができなかった、同じ学年であってもみんなの考えを知ることが少なかったので平岡先生がそういう風にプリントしてくれているおかげで、それが毎回来しみて仕方がありませんでした。

・『こころ』は楽しかった。やっぱり作家が書いた（しかも有名な！）のは面白いな。有名になるわーと思った。『こころ』の紹介文また書きたい。

・「はるはあけぼの」を読み清少納言はとても感性が豊かだと思った。そして、千年以上前の人たちも自分たちと同じ朝日を見ていたのだと思うと、少し不思議なつながりを感じた。きつと、清少納言は千年後を生きる僕たちにも自然の美しさを伝えたかったのではないかと思った。

・僕は「春はあけぼの」を読んで、沖縄の西表島を思い出しました。朝の五時半くらいに朝焼けを見に行つてだんだんと白くなつていく山際を見て、これを思い出しました。「春はあけぼの」を知っていたら、もっと素晴らしいものに見えた気がしました。

やはり、授業は楽しく、わくわくするようなものでありたいと思う。また生徒達にはわが国の古典や文学を愛する日本人になつて欲しい。そのためには古典や文学の魅力を伝えられるような授業を今後もめざしていきたい。

仲間の書いた文章から学ぶことが多いという感想も毎年、多い。今後も仲間の書いた作品からお互い学びあえる、そんな雰囲気大切にしたい。実際、私自身も10年間の生徒達との学び合いの中で、生徒達の素晴らしい想像力と感性に驚き感心させられたのだ。

受験を授業の延長線上に考えた暗記が中心の授業、とにかく面白い文章を書くことを求める授業で生徒を締め付けるようなことは避けて行きたい。ただ、上手な文章を書くことを求めるだけではなく、表現することの面白さ・素晴らしさを実感し、古典や現代文を学んだ後、現在の自分自身の生き方・考え方を見つめ直すことができる、そんな授業作りを今後も大切に行きたい。

注 この小論は2011年度「第60回読売教育賞国語教育部門」において

優秀賞を受賞した小論を骨子としています。

受贈雑誌（九）

法政文芸

前橋文学館研究紀要

待兼山論叢

三重大学日本語文学

三田国文

武庫川国文

横浜国大國語研究

横光利一研究

米澤国語国文

立教大学大学院日本文学論叢

立教大学日本文学

立正大学國語國文

立正大学大学院日本語・日本文

学研究

論究日本文学

論輯

法政大学国文学会

萩原朔太郎記念・水と緑と詩の
まち

大阪大学大学院文学研究科

三重大学人文学部日本語日本文
学研究室

慶應義塾大学三田国文の会

武庫川女子大学国文学会

横浜国立大学国語国文学会

横光利一文学会

山形県立米沢女子短期大学国語
国文学会

立教大学大学院文学研究科日本
文学専攻

立教大学日本文学会

立正大学國語國文学会

立正大学大学院国文学専攻院生
会

立命館大学日本文学会

駒沢大学大学院国文学会

（平成二十三年十二月一日～平成二十四年十月三十一日）